



はまったら  
抜けたせなの!?

# 食虫植物

田辺直樹・監修



## はじめに

自然環境の中では、植物を食べる小さな虫を大きな虫が食べます。その虫を鳥や小動物が食べる。さらに、その動物をもっと大きな動物が食べます。この食べる・食べられるのつながりを「食物連鎖\*」と呼びます。

しかし、この本でとりあげる食虫植物は、食物連鎖の一般的な流れに逆らって、虫を食べてしまう植物なのです。なんと魅力的な植物なのでしょう。

それら食虫植物は、虫を捕らえるために、すこし変わった姿に進化しました。本書では、捕らえ方のタイプごとに食虫植物を紹介し、それぞれの形状には、きちんと意味があることをわかりやすく説明しています。それは、食虫植物が自生している環境とも深い関係があります。

世界各地だけではなく、日本国内に自生する種も多くあります。もしかすると、みなさんの身近な環境でも発見できるかもしれません。

そして、食虫植物を栽培し観察することで、もっと食虫植物の魅力を発見できることと思います。

\*がついている言葉は、P.60の用語解説で説明しているよ。



捕虫のしくみや植物のからだのようすを説明する上で、一部、CGイラストや合成写真を作成して掲載しています。

## もくじ

はじめに	02
食虫植物ってどんな植物?	04
なぜ虫を食べるの?	05
食虫植物はどこに生えてるの?	06
どれが食虫? あやしい植物たち	08
植物の名前はいろいろある	10
原種と園芸交配種がある	10

### と 捕らえ方別 食虫植物図鑑

<b>閉じこみ式</b>	12
ハエトリグサ	14
ムジナモ	20
<b>ねばりつけ式</b>	22
モウセンゴケ	24
ムシトリスミレ	30

自生地を観察	35
観察できる自生地	36

<b>落とし穴式</b>	38
ウツボカズラ (ネペンテス)	40
サラセニア	46

<b>吸いこみ式</b>	50
タヌキモ	52
ミミカキグサ	56

<b>一方通行式</b>	58
ゲンリセア	59

用語解説	60
索引	61



# 閉じこみ式

閉じこみ式の代表は「ハエトリグサ」です。葉の一部が進化した「捕虫葉」は、虫を捕らえるための葉のことで、虫をはさむように動くことができます。葉の表面にある「感覚毛」で、虫が触れたことを感じとることができて、とてもすばやく葉を閉じることができます。ハエなどの昆虫が感覚毛に触れると、植物とはおもえない速さで虫をはさみます。人間が指で触れても捕虫葉は閉じますが、一回閉じるためにたくさんのエネルギーを使ってしまう。

あ〜  
動けないよ〜

ハエトリグサの  
葉が閉じてる！  
ハエを捕まえてるよ！



ハエトリグサ (ハエトリソウ)

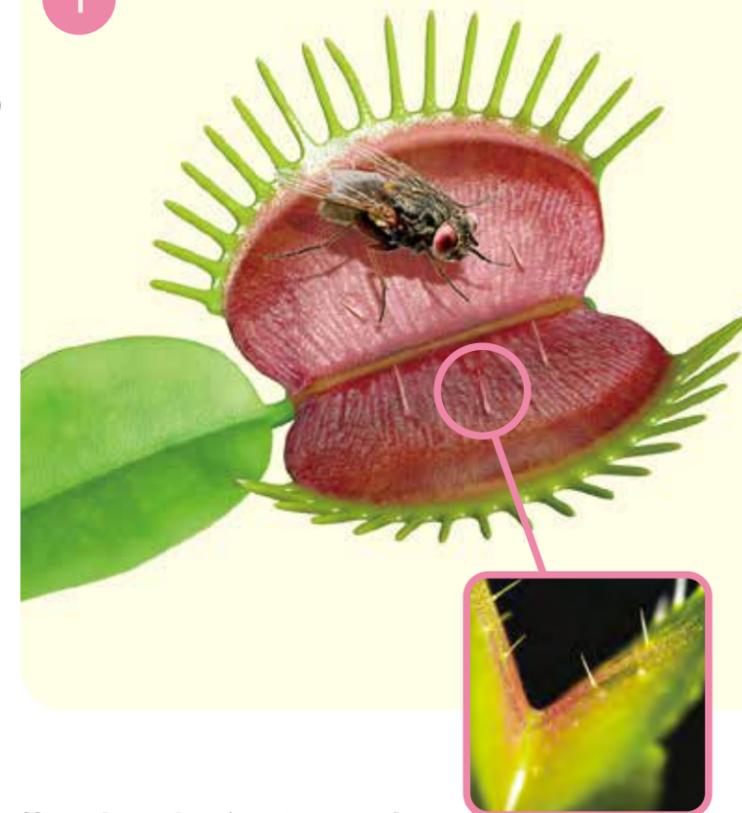
## 捕らえ方

虫が左右3本の  
感覚毛に触っても、  
最初は閉じない。

感覚毛に虫が触れると、  
弱い電気が発生して、  
葉の細胞に蓄積される。  
2回分の電気がたまると、  
葉がパタリと閉じるわけだ。



1

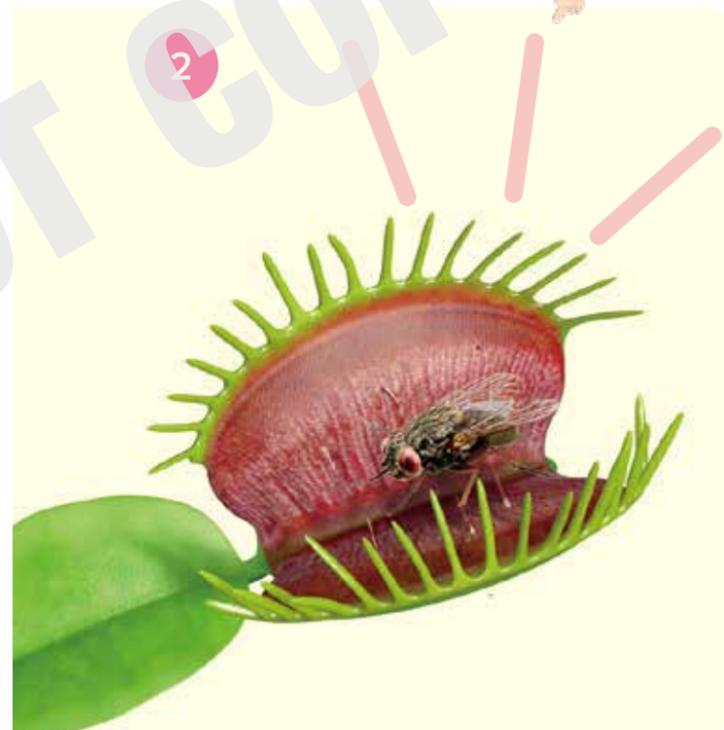


閉じこみ式

感覚毛

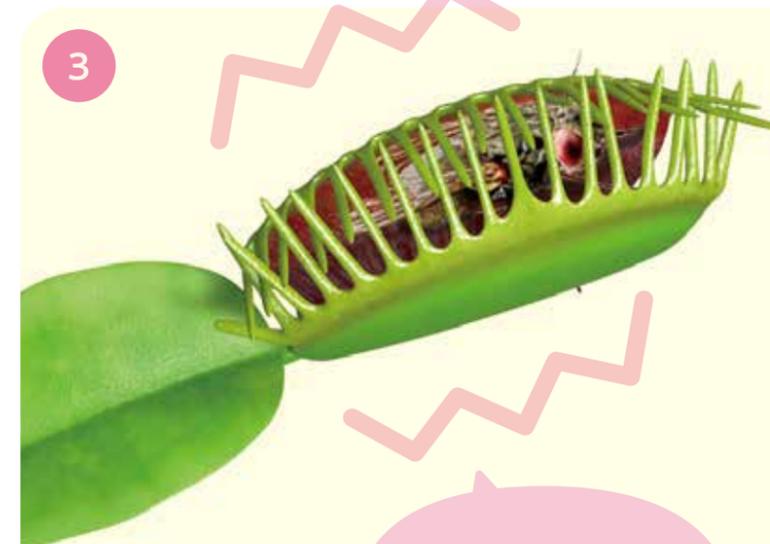
葉の上の虫が、もう一度  
感覚毛に触った瞬間に、  
0.1～0.3秒という速さで葉を閉じる。

2



葉はしだいに強くしまって、  
虫の体液を絞りだす。  
葉の消化腺から消化液\*をだして、  
消化、吸収をする。

3



かたく閉じた  
葉のうちがわは、  
消化液がよだれのように  
たまってるぞ！

## ハエトリグサの自生地での原種はバラエティー豊か

アメリカ合衆国のノースカロライナ州では、さまざまなタイプのハエトリグサが生えています。葉が赤かったり、緑だったり、葉が立ち上がったりといろいろで、見ていて飽きません。



© Tanabe

## ハエトリグサの園芸種

栽培用には、さまざまな園芸種があります。それらの多くは原種から交配\*されたものです。園芸種は、捕虫葉が大きかったり、栽培しやすいように品種改良されたりしています。



# ムジナモ

ムジナモは、ヨーロッパからアジア、オーストラリア各地に広く分布する植物ですが、自生地はとても少なくなっています。かつては日本の本州の池などでも見ることができましたが、環境の変化で希少種となっていました。ムジナモは根がなく、春から秋には水面いっぱいに葉を密集させて群生します。真夏になるとわずかな間だけ、葉の脇から花芽をだして5mmほどの白い花をつけます。気温が下がると、葉は茶色くなって枯れますが、葉先に葉が密集した「冬芽\*」をつくり、池の底に沈んで越冬します。春になると、冬芽は緑になって水面に浮かび、成長をはじめます。



茎を中心に  
カットしたもの



閉じこみ式

## 牧野富太郎とムジナモ

世界各地に分布するムジナモですが、日本では1890年に「日本の植物学の父」と言われる牧野富太郎博士が、東京都江戸川区北小岩で確認したのが最初です。江戸川河川敷の用水池で、柳の木にもたれて、ふと水面を覗きこんだらそこに浮遊していたそうです。牧野博士は「ムジナモ」という和名をつけました。フサフサしたタヌキの尾のようで、「タヌキモ (P.52)」とつけたかったようですが、この和名は先にあったため、タヌキの別名「ムジナ」をつけたそうです。



宝蔵寺沼 (埼玉県) ムジナモの自生地として国の天然記念物に指定されました。生息域に立ち入ることはできませんが、同じく羽生水郷公園内にあるさいたま水族館では、栽培されているムジナモを見ることができます。

ムジナモは、二枚貝のような「捕虫葉\*」をすばやく閉じることで、ミジンコなどを捕まえる。

